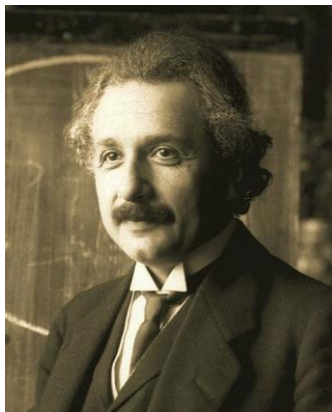


いぶき 21 号 平成 24 年 10 月

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第20回：アルベルト・アインシュタイン（1879～1955年）



「近代日本の発展ほど世界を驚かせたものはない。一系の天皇を戴いていることが今日の日本をあらしめたのである。私はこのような尊い国が世界に一ヶ所ぐらいなくてはならないと考えていた。世界の未来は進むだけ進み、その間幾度か争いは繰り返されて、最後に戦いに疲れる時が来る。その時人類は、まことの平

和を求めて、世界的な盟主をあげなければならない。この世界の盟主なるものは、武力や金力ではなく、あらゆる国の歴史を抜きこえた最も古くてまた尊い家柄でなくてはならぬ。世界

の文化はアジアに始まって、アジアに帰る。それにはアジアの高峰、日本に立ち戻らねばならない。われわれは神に感謝する。われわれに日本という尊い国を創ったことを。」（出典：『「日本文明」の新価—今、世界が注目する』清水馨八郎著、詳伝社黄金文庫）

1879年(明治12年)ドイツで生まれたアインシュタインは、5歳まではあまり言葉を使わず読字障害であったとも言われています。しかし、5歳のとき父からもらった方位磁石がきっかけで自然界の仕組みに興味をもつようになり、ユークリッド幾何学や微分積分学などを寝る間も惜しんで独習し、数学には突出した才能を示したようです。チューリッヒ連邦工科大学を卒業後、スイス特許庁に就職し、奇跡の年と称される1905年には「光量子仮説」「ブラウン運動の理論」「特殊相対性理論」に関する5つの重要な論文を発表しています。アインシュタインは1922年(大正11年)11月17日に日本を訪れた際、訪日する船の中でノーベル物理学賞受賞の知らせを受けました。日本には43日間滞在していますが、帰国間際の12月23-27日には門司や博多を訪れ、福岡市大博劇場で一般講演も行っています。

上記の言葉は、アインシュタインが離日直前に新聞に寄稿した文章とのことで、清水馨八郎氏の著作に「アインシュタインの予言」として紹介されているものです。明確な出典が不明なため創作であるとの指摘もありますが、いずれにしろ上記の文章は、「世界を救う」というわれわれ陽光子の使命を再認識する上で、今こそ日本人一人一人が噛み締めるべき重要なメッセージのように感じます。(M. I)